

県民公開講座

乳がんなんて こわくはない

知ろう!

マンモグラフィの有効性
早期発見・早期治療こそ大切

乳がんについて考え、マンモグラフィ(乳房エックス線撮影検査)検診の大切さを学ぶ

県民公開講座「乳がんなんてこわくない」(ピンクリボンかがわ県協議会・健康新聞主催)が

10月8日、高松市のサンポートホール高松で開催されました。

作家の俵萌子さん、高松赤十字病院の吉澤潔さんの講演のほか、

パネルディスカッションでは、乳がんの早期発見・早期治療の重要性について理解を深めました。

主催者挨拶



ピンクリボンかがわ県協議会代表
香川県医師会会長
森下立昭氏

乳がんの年間死亡者は約1万人。交通事故による死亡が年間1万人不足ですから、乳がんの死亡率がいかに高いかが分かります。毎年3万から4万人が乳がんにかかっていて、3人に1人が亡くなっています。

10年ほど前、日本女性のがんといえば胃がんが多く、次いで大腸がん、乳がんでした。胃がん、大腸がんは横ばい、もしくは減少しているのに対し、乳がんだけは年々増加しています。欧米諸国ではここ数年、乳がんの死亡者が減っていますが、日本との差は乳がん検診の受診率にあるようです。乳がんは生活習慣を変えても防げません。怖い病気ですが、早期発見、早期治療で治せる病気です。

座長挨拶



香川労災病院副院長
鶴野正基氏

乳がんは確実に増えていて、2005年には4万人を超えました。同じ年、県内の病院を調査したところ、香川県では患者数が500人を超えていました(99%)。このデータを日本の人口に照らし合わせ120倍すると、6万人となる。全国の患者数が4万人ということは、香川県では乳がんが多いということになります。

千の風に包まれて
早く見つけて早く治さないと がんは怖い

講演

NPO法人がん患者団体支援機構理事長
俵萌子氏



1930年大阪生まれ。新聞記者を経験後、女性・家庭・教育問題を中心とした社会評論および作家として活動。昨年2月よりNPO法人がん患者団体支援機構の理事長に就任。主な著書は「ママ、日曜ありがとう」(秋田書店)「子どもの世話にならずに死ぬ方法」(中央公論新社)「生きることは始めること」「癌と私の共同生活」(海竜社)ほか

がんの恐怖克服には 病気の正体知ること

がんの怖さを乗り越えるには、がんについて学ばなければなりません。私は乳がんの勉強をする間も、手術の日を迎えました。その後、抗がん剤治療を終え、ようやく病気について勉強しようという気持ちになり、何冊も本を読みました。病気の正体を知ってこそ、怖さは減るんです。

術後の5年間は、再発の恐怖におびえて過ごしましたから、5年後、担当医師から「おめでとう」と電話をもらった時は嬉しかったですね。

最大の危険を乗り越えた安堵感と、早くがんを忘れたいと思いつつ、18年前に乳がんを患った女性に出会いました。彼女は私に「温泉に入れますか?」と聞きます。私は周りの視線が乳房に集中すると思うと、恐ろしくて温泉に入れないと言います。彼女も入れないと言います。でも温泉は大好きで、温泉に入りたいと彼女は言いました。

30代の初めに乳房を失い、50歳まで温泉に入れなかった彼女をなんとかして入れてあげたいと強く思いました。「乳房のない人を集めたら、一緒に温泉に入れますか?」と聞いたら「入れよう」と答えたんです。

ホームページで「乳がん」で乳房を失ったけど、星空の下で両手を広げて露天風呂に入りませんか?と問いかけると、400人の申し込みがありました。

http://www.takarimado.com。私はその人たちと「1、2、3で温泉に入る会」を作りました。

今、がん医療の問題には、緩和医療の遅れ、地域格差是正が急務

ば、乳がんは怖くないんです。しみじみと感じています。

でも本当は温泉に入るのは、1人の力では無理な

今、がん医療の問題には、緩和医療の遅れ、地域格差是正が急務

自分の体は醜くない、互いに「素敵」と涙

治療の地域格差や緩和医療の遅れなどがあります。こういことを国に訴えるに